



## 農業生産額一位の田原市と田原研究所

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員  
 BASF ジャパン株式会社農業事業部マーケティング部シニアマネジャー  
 藤原 雅実

弊社 BASF ジャパンは研究開発活動の見直しを行い、2016 年末をもって愛知県田原市の田原研究所を閉鎖いたしました。当研究所の最後の所長を勤めた者として田原研究所と田原市の農業について書かせていただきたいと思います。

愛知県田原市。田原町と赤羽根町が平成 15 年に、続いて渥美町が平成 17 年に合併し現在の田原市が誕生しました。年平均気温 16 度、年降水量は 1,700mm。日照時間に至っては 2,200 時間にも達する温暖な地です。現在は市町村別の農業生産額は発表されていないようですが、平成 18 年の田原市のそれは 724 億円\*にも上り全国一位の生産額を誇っています(\*田原市ホームページより)。ただ昔から現在のように農業に恵まれた環境ではなく、この地方は水源に恵まれず絶えず旱害に悩まされ、所によっては飲料水すらことを欠く始末であったようですが、先人の苦労によって用水事業構想が胎動し、昭和 43 年に豊川用水として全面通水を見ることができました。用水の役割は画期的であり、畑地灌漑が広い面積にわたって実施できるようになり、畑地・施設農業に新しい展開と大きな役割を果たしました。播種作物の発芽揃いが向上し、苗移植作物では育苗日数が短縮され、東三河地域に野菜（キャベツ・ハクサイ等）の露地栽培や、青果（メロン・トマト・きゅうり等）、花卉（特に電照菊）の施設園芸においては我が国有数の主産地が形成され、果物（みかん・カキ等）においても知られるようになりました。いまでは秋冬キャベツでは全国生産の半分を占めるなど生鮮野菜類の産地化と温室・畜産団地の造成もされた全国的にも類を見ない農業先進地域となっています。

このような田原市における研究活動は、旧日本サイアナミッド時代から始まります。同市緑が浜という海岸沿いにあった旧研究所は、常時塩害に悩まされまた手狭であったようで

す。そのため移転を検討し渥美半島内陸部の六連町に土地を購入、建設を始め 1995 年に竣工しました。その後 2000 年に BASF によるアメリカンサイアナミッドの買収を機に、当時の BASF ジャパンの研究拠点であった神奈川県海老名市の施設も閉鎖・統合し規模も拡大して再始動しました。敷地面積はおおよそ 2ha とコンパクトな研究施設でした。ただ BASF の農業事業においては、日本をはじめアジア地域の重要な研究施設としての地位をもち、特に水稻剤の初期スクリーニング試験の実施や、製剤開発分野においては、粒剤・ジャンボ剤などの処方選定を担ってきました。

なかでも、研究所のオープン当社から着手した除草剤シクロスルファミロンを含むジャンボ剤の開発では有効成分の迅速な拡散と均一性を両立するため、おびただしい数の分散助剤を検討・選抜し、目標とした技術性能を有したラジカル処方の製品化にこぎつけました。ラジカル（過激な）とは粒剤が水面を拡散する際、激しく踊るようにはじけて広がっていく様子に由来するものです。また、シクロスルファミロンにつづく大型製品であるオリサストロビン・フィプロニル等の箱粒剤では、各有効成分の粒剤内部からの溶出速度の制御を厳密に行うことにより、処理後、比較的早い時期から長期間にわたり高い稲体内濃度を維持させることに成功しました。これにより初期病害虫はもちろん中後期まで防除することが可能となりました。

このような研究所でしたがこの地での活動は中止し、生物開発については日本植物調節剤研究協会のご厚意で千葉支所の一部施設と圃場をお借りして活動することとなりました。これからもより厳しさを増している日本農業への更なる貢献をめざし邁進する所存でございます。